

共に学ぶ

同和教育主事 富加見 正夫

‘93年度も部落問題についての全体学習が、教職員の相互理解のもと実施できた。’92年度の反省をしながら部落問題学習は部落に生まれた者だけの学習ではなく、地区・地区外を問わず、全ての人たちに問われている問題であるということを明らかにし、それぞれが自分の問題としてどのように捉え、どう行動していけばよいのかを生徒も教師も一緒に考えながら部落問題学習を実践してきた。体育館での全体学習で学習会に参加している生徒が「学習会での部落問題学習は楽しい。自分の本音が言えるし、自分の言ったことに対してみんなが応えてくれるし、語り合える。今は部落に生まれたことを誇りに思う。」と話す。「自分も部落に生まれた。みんなと同じように学習会に参加し、部落差別に立ち向かっていかなければならない。しかし今までの自分は逃げてばかりいた。これからは学習会に参加してみんなと一緒に頑張りたい。」という。

また、地区外の生徒は自分の学習を振り返って「自分とかかわり合いがないと思っていた。だから1・2年の頃は差別はなくさなければならぬとか、差別をしないようにしますと、先生が喜ぶようなことを言ってきた。今考えるとこんな自分を恥ずかしく思います。」また、ある生徒は「私のばあちゃんは、部落差別をします。〇〇の子とは遊ばれんよとか……言います。」と家族の差別を語る。

このように心が解放するにしたがって、心の奥底にある自分の苦しいことや本当の思いを生徒は語る。ややもすると、表面のきれいごとで済ましていた学級での部落問題学習が全学年や全校生の中での学習で多くの生徒が本音をだし、語れるようになってきた。このことは教師が部落問題を教える側から生徒と共に必死に考え、共に苦しみ、自らの本心を語ることで共に学ぼうとする教師の姿勢を生徒たちが感じたことによるものである。また、学習を積み重ねることにより、生徒は政治的に作られた部落差別の不合理性に気づくと同時に、部落の先人達が差別に負けず、人間として誇りを持って生きぬいてきた生き方を尊敬し、理解できた結果だと思う。

‘90年からの全体学習により、生徒や教師の部落問題に取り組む姿勢や考え方は変わってきた。本年度も多くの生徒が全体学習で本音を語り、さらに高校でも頑張って活動したいと決意を語り卒業した。また、1, 2年生も自分の思いが語れ、部落差別の解消に向けての連帯の輪が広がりつつある。このように成長しつつあることは嬉しいことだ。

ある時、1年生のA子を書いた部落問題に関する作文が、奨励賞になり、本人はもちろん保護者や学校関係者は喜びあった。早速、町内の有線放送から電話があり、町内全域に放送したいとの連絡があった。嬉しさ半分、心配半分で担任や保護者に相談する。A子の作文の中には部落宣言につながる内容があったからである。校内の全体学習の中では自分の意思で部落宣言する生徒も多いが、町内全域となるとどうかという思いがあり、放送してよいかどうか決断できない。1年生のA子にとって本当に部落問題が理解できているのだろうか。学校のおしつけになってやしないか本人に思いを聞く。その後、担任と共に両親に会い、A子の思いも伝える。翌日母親から

電話があり、最近はA子に負けだしたと言う。家でこの問題を話し合っているとき、娘は「私は発表したい。学校でも全校の部落問題意見発表会の場で部落宣言してきたし、自分の思いは堂々と言える人間になりたい。それなのにどうしてそんな心配をしなければならないのか。」という。母親は「今のA子は私より、部落問題についてしっかりした考えをもっている。私の方がもっと勉強しなければ……。」と話してくれる。さらに続けて話してくれる。「A子は嫁に行くからかわいそう。差別のある社会だから地域から出ると差別を受けると思う。兄ちゃんはこの地域に住むから安心だがA子は心配だ。」と母親としての心境を語ってくれる。最後に「先生、A子の意思にまかせたからもう一度気持ちを聞いてやって。A子のいいようにさせてやって。」と言ってくれた。担任と一緒に話をして聞くがA子にすれば、どうして悪いこともしてないのに何回も何回も話をせねばならないのか。と思ったと思う。社会にはまだ部落差別があること、その差別は結婚問題に深く関与していることなど十分話せたかどうか分からないが、今の私の思いをA子に話してきた。

A子の返事は明快だった。「私、放送します。」その返事を聞いて私たち教師や大人のある意味での考え方の間違いに気づかされた。また、学校の全体学習であろうが町内の有線放送であろうが内容に関係なく、誰もが心配することなく自分の思いが語れる差別のない世の中をつくらなければと心に刻むと共に、自分自身の考え方の間違いを反省させられた。しかし、反面A子の部落問題をまっすぐ見すえながら、差別に立ち向かって行く姿勢が嬉しかった。A子により周りの教師や両親までがいろいろと教えられた。このように学級や学年、あるいは全校的な部落問題学習の実践が、確実に生徒の部落問題に対する意識を高めている。

私は、8年前に偏見と差別意識をもって板中に赴任してきた。どこからそのような差別意識が入ったか定かではないが、物心がついた頃に親や周りの人の会話から自然に刷り込まれたのではないかと思う。「部落」という言葉にすごく敏感でその問題をいうのに特に意識して話した。担任として生徒と部落問題学習もしてきた。しかし、そんな状態の自分なので部落差別の本質が見えず、子どもたちの思いも十分理解しないまま自分の判断だけで型どおりの部落問題学習をしてきた。生徒が反応しないのは生徒自身が真剣に考えてないからだと勝手な理由をつけていた。

このような自分の差別意識をやさしく、少しずつ取り除いてくれたのが部落のお父さんやお母さんであった。ある父親は、差別者の私を怒りもせず、自分の生い立ちや家族のこと、地域のことなどわかりやすく教えてくれる。ある時は酒を飲みながら、ある時は泊めてもらい朝食をいただきながら、家族ぐるみでいろいろなことを教えてくれる。自分も心を開き、わからないいろいろなことをぶつけていく。そんななかで、少しずつ子どもを見る見方や部落に対する考え方が変わってきた。人としての生き方や考え方を教えてくれた多くの人たちに感謝せずにはいられない。

先日、ある母親からこのような話を聞くことができた。「部落に嫁いでもう何十年にもなる。子どももでき、この地域で大事にされ、もう何もかも理解して地域にとけ込んでいるつもりだったが、近所の人話から自分はまだまだとけ込めていないのかなあ。地域に認められていないのかなあ。」と考えさせられたという。

部落問題は本を読んだり、話を聞いたり、少しのことを体験したから理解できたとはもちろん考えてはいない。自分にはまだまだ変えなくてはならない差別意識はいっぱいあるし、部落問題も十分には理解できてない。しかし、ひとりの人間として、自分と部落問題のかかわりを常に明らかにしながら、目の前にいる子どもたちと共に考え、一緒に歩んで行きたいと思う。

本年度の全体学習は3年生の「母の願い」をスタートに「自分以下を求める心」、「意識の芽ばえ」……と計画的に実施していった。学級生徒と担任とがしっかり心をつなぎあつての授業ができる。ある時は沈黙が続き、体育館内が重苦しい雰囲気にも包まれたこともある。しかし、その学習を受けての話し合いでは学級や学年を越えて遠慮のない意見の突きつけがあり、その意見によっては互いに苦しい思いをするときもあるが、逆に発言することによって胸にあるこだわりがとれ、スッキリとするときも多くある。ひとりの悩みや疑問に学年を越えて多くの生徒や教師がつながって応えていく。これが全体学習のよさだ。

’94年度もまもなく新職員、新学級のもと、全体学習がスタートする。誰もが部落問題学習を自分の問題として考え、高校生になっても、就職しても、互いの人権や人格を尊重でき、よりよい人間として生きるための学習として、全体学習を実践していきたい。

